

有限会社 荒木屋

震災直後から休業なく営業し村民と村外避難者を支えました。特例で全村避難後も継続して営業。現在も社長以下7人が勤務しています。



村民や除染関係の車両が次々給油に訪れます

声



若松 登志夫さん
(伊丹沢) 従業員

震災直後は、避難する車が長い行列を作り、非常用の手動のレバーを回して給油を続けました。水道管の修理などもあり本当に忙しかった。避難後は福島市松川町から通勤。現在は重機の給油など、除染現場にも配達をしています。

給油に訪れた村民が事務所まで営業を交わします。飯樋町の商店街で営業しているのは2軒のみ。来店客は「さびしいけど、荒木屋さんが開いているのはほっとする」と話します。事業を続けた理由を尋ねると、社長の荒渟さん(飯樋町)は「取引先が操業していたし、また残っている村民もいる状況でしたから」と当時の振り返り返ります。東京電力による賠償が始まるまでの営業には、やりくりにも格段の苦労がありました。以来、村民の往來を支え続けて今に至ります。最近では、除染現場へ燃料を供給する配達も多くなっているそうです。



避難先の事務所で図面を広げ朝の打ち合わせ

有限会社 長谷川電気工事

社長以下8人体制で事業を続けています。避難後は仙台市や郡山市にも仕事を求め、苦しい時期を乗り越え事業を継続してきました。

声



長谷川 拓也さん
(宮内) 従業員

村内の現場では「帰って来んのかい」と聞かれることもありますね。村民の方に支えられます。ここまできた会社です。帰村となれば一緒に戻って続けていくつもり。それが皆さんの役に立てる形であれば一番いいと思っています。

社長の長谷川長喜さん(宮内)は、妻の圭子さん(2人)の息子、拓也さん(直也さん)を含む社員と力を合わせて事業を続けてきました。村に道具や車両があり、行き来をしながら遠方の現場にも向かいます。村内では、防犯灯の修理やテレビ映りの相談などで呼ばれますが、本格的な仕事はまだまだ。「復旧復興の新規事業が村内事業者のチャンスになるとよいのですが」。村商工会の会長でもある長喜さんは、「帰村になれば先行して戻り、協力したい」と話します。「小売り関係が村内に戻れるよう何とかしていきたいですね」。

村民を待つふるさと復興への歩み 飯舘村

全村避難から3年

放射線対策を含む安全管理や遠距離通勤など多くの課題を抱える村内操業は、事業者・従業員双方の努力により支えられています。また、その実績は、直接的・間接的に、村の再生と復興の足掛かりとなっています。



震災後の混乱の跡も残る村内の作業場で。代表の菅野勝男さん(蕨平)

菅野建築

新築・増築・リフォーム等を手掛けています。震災後もほぼ休業なし。村内での事業再開は避難指示区域の見直し以降に認められました。

声



菅野 勝幸さん
(蕨平) 従業員

「自分がやるしかない」という気持ちでしたね。避難指示が解除になれば村に戻るつもりです。仕事もあると思っています。震災があったことで大工の需要が増えていますから、若い大工をしっかり育てていきたいと思っています。

「震災直後から長男の勝幸が消防団で活動していたし、大工の需要が増えましたから、休業は短かった」と話す代表の菅野勝男さん。仕事の右腕でもある勝幸さんは「自慢の息子」です。現在は、村内よりも村外の現場が多くなりました。「除染が進まない限り、村内での仕事には限界がある」。震災後は大工の仕事が主となり、村内では家屋の修繕が中心です。2月の大雪による修繕依頼もあります。会社は、避難先から現場へ通って来る若い従業員たちに支えられています。また、他県の減容化施設の見学に出掛けるなど、復旧・復興事業にも目を向けています。「仕事は探せば出てくる。いろいろやってみなきゃ」勝男さんは言葉に力をこめて言いました。



福島市から通う玉川村の現場でも若い従業員が活躍